

2016年度

事業報告

自 2016年 4月 1日

至 2017年 3月31日

公益財団法人 正力厚生会

〔がん患者支援事業〕

＜患者団体への助成＞（継続）

全国のがん患者会や支援団体などの中から、資金不足からイベントやプロジェクト、研究などができない団体を一般公募し、専門委員会での審査を通過した団体に活動資金を助成する事業。全国の25団体に助成しました。

助成金は、スキルス胃がんなど希少がん・難治がんをテーマにした啓発用冊子の編集・発行、小児がん患者の旅行支援などに充てられました。

＜医療機関への助成＞（継続、新3か年計画の中間年度）

「地域における緩和ケアと療養支援情報プロジェクト」（国立がん研究センター、がん研究会、東京大学死生学・応用倫理センター、帝京大学）は、「ご家族のためのがん患者さんとご家族をつなぐ在宅療養ガイド～がん患者さんが安心してわが家で過ごすために～」を完成させ、地域や医療現場で、ガイドを普及・活用する取り組みを進めています。

2016年度は、岩手県大船渡市で、医師や看護師、ケアマネジャーら在宅療養に取り組む専門職を対象にした研修会を2016年5月21日に開催し、現状と今後の課題について活発な意見交換をすることで、多職種連携の重要性を改めて確認しました。

引き続き、この研修会で話し合われた内容を、地域と広く共有できるよう2016年11月3日に、一般住民を対象とした「がん医療フォーラム」を開催し、医療従事者をめざす地元高校生を含めた地域住民約100人が集まりました。事後のアンケートによると、フォーラムの内容について「大変分かりやすかった」「分かりやすかった」が90・3%、「大変役に立った」「役に立った」が88・7%と好評でした。

この「がん医療フォーラム」の様子は、2016年11月4日付読売新聞岩手県版に記事として掲載されたほか、正力厚生会と同プロジェクトのインターネットのサイトで、全編視聴することができます。

岩手県大船渡市を舞台に「研修会＋フォーラム」の2本立てを実践することで、①多職種連携の重要性を深く認識することができた②多職種連携の重要性については、専門職に加えて地域住民の理解と協力が必要であることが浮き彫りとなり、地域住民への浸透につながった③地域の次世代を担う若者に参加してもらうことで人材育成につなげられる可能性を見出した――の3点を成果物として得ることができました。

この成果を2017年度事業に生かし、プロジェクト事業の総括に結びつける方針です。

＜読響ハートフルコンサート＞（継続）

がん患者や家族たちの心を癒すため、読売日本交響楽団員を全国各地のがん診療連携拠点病院に派遣して、弦楽四重奏などを披露しました。2016年度は、一般公募に応じた医療機関の中から、地域バランスなどを考慮して正式決定された全国8会場で開催しました。開催実績は、下記の通りです。

各会場では、患者とその家族や医師、看護師などの医療従事者約100人が集まりました。

会場からは、「毎日の治療が続く中で一時でも豊かな時間を過ごすことが出来て良かった。こうした時間がもっとほしい」（26歳女性患者）「好きな曲、懐かしい曲ばかりで感激した」（68歳男性入院患者）などの声が寄せられました。

なお、各会場でのコンサートの様子は、読売新聞の各地域版に掲載されました。

- ① 京都第二赤十字病院 2016年6月2日
- ② 兵庫県立淡路医療センター 2016年6月3日
- ③ 広島赤十字・原爆病院 2016年9月20日
- ④ 佐久総合病院佐久医療センター 2016年9月28日
- ⑤ 福井県済生会病院 2016年11月15日
- ⑥ 三重中央医療センター 2016年12月9日
- ⑦ 久留米大学病院 2017年1月11日
- ⑧ 武蔵野赤十字病院 2017年2月17日

以上